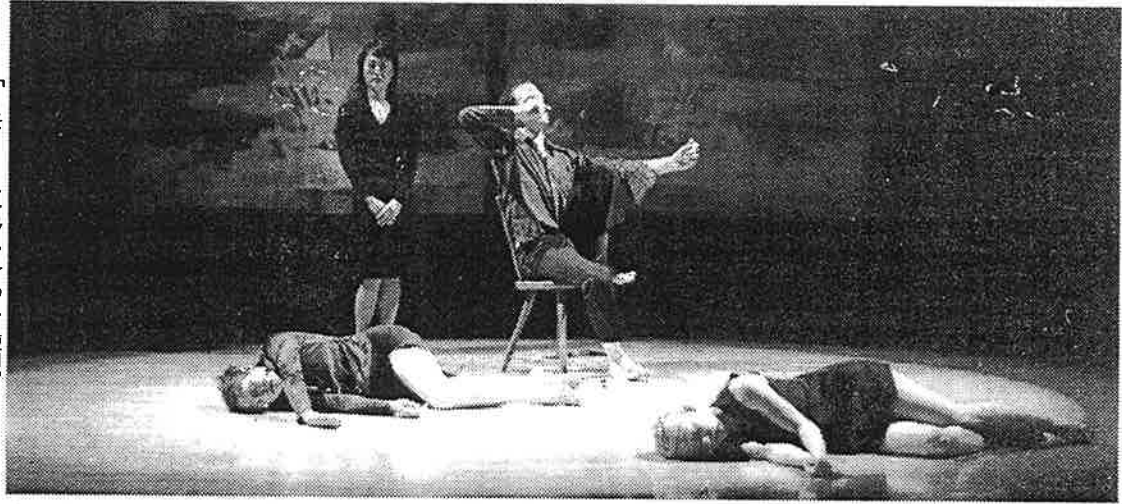


THE YOMIURI AMERICA

MARCH 5, 1999



「メモリスキャン」の一場面。中央に立つホワン (Photo/Mark C)

「メモリスキャン」発表

振付家のホワン

ニューヨークを基盤に活躍する振付家、クーシルジャ・ホワン=写真=が新作「メモリスキャン」(ダンス・キモトクミコ公演)を3月10日から13日まで、キッチン(同市西19丁目512番地)で発表する。96年に公演した「マサオ」は、自らの体験を反映させた在日韓国人の歴史がテーマだった。その後、名前を黄本久実子という日本語名から「本来」の韓国語名に変更。「国という枠では自分を表現しきれないと感じた。名前を変えたのは、在日を強調するためではなく、これまでの思いがふっ切れたから」——新作は、国を越えた「個人史と記憶」がテーマ。映像とダンスが交差する新しいパフォーマンスを目指す。

(文・写真/渡辺サチコ)



「日本にいた時は、世間知らずのわがまま娘だった」と、今ではイーストビレッジの街角に溶け込んだスタイルで話す。81年、マリス・カニングハムのダンス哲学に感銘を受け、大阪からニューヨークへ。ご飯にふりかけだけの夕食でも「これがアーティストの生活だ。美しい」と感じ、ダンスにまい進した。

新作「メモリスキャン」では、ダンサー仲間の「記憶」に焦点を当て、ホワンを含めたダンサー5人の個人の記憶をたどった10のエピソードがランダムに語られる。「国、人種を越えた人間の共通部分。何気ない日常に秘められたものをダンスとビデオの新しいコラボレーションで探りたい」

そのホワンが目指すのは「現実の空間で行われるダンスと過去の時間と呼び覚ますビデオによる新しい四次元空間を作ること」。気鋭の映像作家ベントン・ベンブリッジ、カスパール・ストラクの二人を迎えた。以前は、オルタナティブ・バンド「Boosh」のパーカッションist兼ボーカリストとして活躍。それと並行して、86年に「ダンス・キモトクミコ」を設立。「自分の考えが実際にダンサーに伝わり、作品という形になる。それが振り付けのだいご味。自分なら決してやりたくないと思う振り付けでも踊ってくれて、「こんなことようやくできるわ」と笑いと感激する」

現在は、「マサオ」「メモリスキャン」に続く3部作の完結として「ハッピー・エンディングズ」を準備中。日本人映像作家との共同作になる予定だ。また2000年には、「メモリスキャン」の全米ツアーを行う予定だ。13日の公演後、ホワンが自作を解説。問い合わせは ☎212・255・5679(平日)。